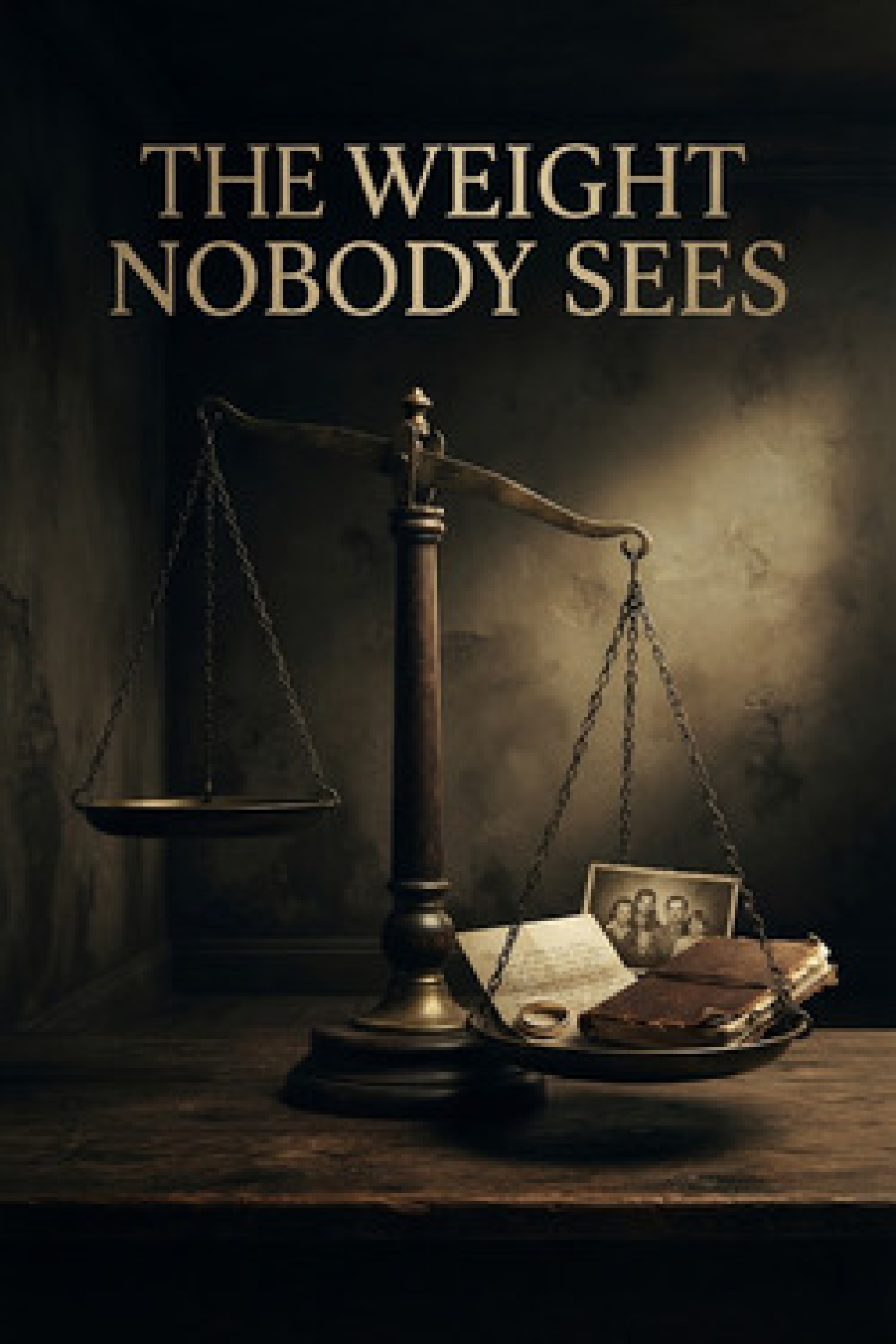
THE WEIGHT NOBODY SEES



敷居 9

誰にも見えない重み

若いころ、義務は厳めしい言葉に見える。

規則の響きがある。

犠牲の響きが。

責務の響きが。

冒険の魅力はない。

成功の色はない。

幸福の言葉すらない。

だから、義務を夢見る者はほとんどいない。

夢見られるのは結果だ。

到達点だ。

獲得だ。

評価だ。

義務は後からやって来る。

静かに。

そして、他の何よりも長く留まる。

長年、私もまた、人生で最も重要な部分は目に見える部分だと信じていた。

昇進。

変化。

重要な決断。

勝利。

やがて時間が、どんな教科書にも説明できないことを教えてくれた。

人の一生は、特別な日々で測られるのではない。

普通の日々で測られるのだ。

誰も見ていない日々で。

ただ、なされるべきことをなすしかない日々で。

気が進まないときでも。

疲れているときでも。

世界が気づいていないように見えるときでも。

義務はそこに生きている。

継続の中に住んでいる。

熱意の中ではなく。

欲望と義務が逆の方向へ歩いていた瞬間を、いくつも覚えている。

誰もが知っている状況だ。

立ち止まりたい。

だが続けなければならない。

離れたい。

だが誰かがあなたを頼りにしている。

自分のことを考えたい。

だが責任が別の場所から呼んでいる。

そうした瞬間に、人生は単純で容赦のない問いを突きつける。

誰にも正しいことを強いられないとき、おまえは何者なのか。

答えは言葉からは来ない。

行動から来る。

義務には代価があると、早くから学んだ。

大半の人が想像するよりも、はるかに高い代価が。

時間を代償にする。

気力を代償にする。

機会を代償にする。

ときには、夢の一部さえ代償にする。

何かを選ぶことは、必然的に、別の何かを諦めることを伴うからだ。

代価のない人生は存在しない。

存在するのは、どの代価を払うかを選ぶ人間だけだ。

キャリアのために家族を犠牲にする男たちを見てきた。

家族のためにキャリアを犠牲にする者たちも。

自由の名のもとに安定を手放す人々を見てきた。

安定の名のもとに自由を手放す人々も。

人生は無料の賞品を配らない。

いつも何かを別の何かと交換する。

この自覚は、世界の見方を変える。

とりわけ、裁くことをやめたときに。

どの選択の背後にも、他人の目には映らない見えない戦いが存在するからだ。

どの責任の背後にも、私的な代価がある。

一見成功に見えるものの背後には、しばしば知られざる断念がある。

年月が経つにつれ、自分の犠牲を語る者への敬意は薄れ、それを黙って生きる者への敬意がずっと深くなった。

本当に責任ある人々は、自分を語りたがらない。

自分にかかっているものを支え続けることで、手一杯なのだ。

家族。

組織。

共同体。

計画。

約束。

望んだわけでもなく柱になる人々がいる。

ある日振り返ると、他の者たちが自分に寄りかかっているのに気づく。

子どもたち。

親たち。

仕事の仲間たち。

友人たち。

脆い人々。

迷った人々。

安定を求める人々。

そのとき、義務は理論であることをやめる。

日々の存在になる。

いつも心地よいとは限らない存在に。

だが、物事に意味を与える存在に。

理解するのに何年もかかった教訓を覚えている。

義務は服従から生まれるのではない。

愛から生まれるのだ。

この違いがすべてを変える。

何かを愛するとき、人はそれを大切に世話する。

世話をするとき、人は責任を負うようになる。

責任を負うとき、人は重みを受け入れる。

そしてその重みは、ゆっくりと、自分の一部になる。

だから、人生で最も重要な義務は、押しつけることができない。

受け入れることしかできない。

どんな法律も、愛することを強制できない。

どんな規則も、そこにいることを強制できない。

どんな権威も、去るほうが楽なときに残ることを強制できない。

これらは内なる決断だ。

そして、いかなる外からの強制よりも価値がある。

義務は私たちを幸福にするのかと、何度も自問した。

今では、その問い自体が間違っていると思う。

義務は、私たちを幸福にするために作られたのではない。

私たちを信頼に足る者にするために作られたのだ。

幸福は来ては去る。

信頼性は残る。

そしてそれこそが、人々が私たちを信頼することを可能にする。

結局、人生で築くものは、大部分この信頼にかかっている。

信頼なしに持ちこたえる家族はない。

信頼なしに続く友情はない。

信頼なしに育つ組織はない。

信頼なしに生き残る関係はない。

そして信頼は、ほとんどいつも同じ問いから生まれる。

「この人は、必要なときにそこにいてくれるだろうか」

都合のよいときにではない。

楽なときにではない。

必要なときに。

時とともに、男であれ女であれ、人の真の価値はとりわけそこに現れるのだと分かった。

その問いへの答えに。

成功にではない。

言葉にではない。

意図にではない。

存在に。

信頼性に。

継続に。

そこにい続ける者の静かな勇気に。

最悪の日々にも。

義務の代価はいくらか。

高くつく。

ときには、望む以上に。

だが、見捨てることに比べれば、限りなく安い。

引き受けた責任の代価は高いからだ。

だが、裏切った責任の代価はさらに高い。

そして時が過ぎるとき、遅かれ早かれ誰にでも訪れることだが、私たちは守り抜いた快適さを思い出しはしない。

思い出すのは、守った人々だ。

果たした約束だ。

背負うことを選んだ重みだ。

そして気づくのだ。犠牲しか存在しないように見えたまさにその場所に、私たちの人生の最も深い意味が隠されていたことに。